

平成 30 年 5 月 30 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463522

研究課題名(和文)高齢者の強み(ストレンクス)を活かした介護予防を推進する地域づくりの支援方法

研究課題名(英文)Community development promoting long-term care prevention based on the strength of elderly people

研究代表者

井出 成美 (Ide, Narumi)

千葉大学・大学院看護学研究科・特任准教授

研究者番号：80241975

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：高齢者のストレンクスを活かした介護予防を推進する地域づくりの担い手として介護予防サポーターの持つストレンクスの構成要素を明らかにした。ライフストーリー手法を用いた調査を実施し、5つのストレンクス「能力」「経験」「自尊心」「目標」「資源」について合計40の構成要素を明らかにした。さらに先行研究で作成した社会的サポートネットワークに貢献できるエンパワメント指標を用いて、一地域で調査を行い、地域づくりに役立てられる住民の強みを把握する方法として有用であるかを検討した。私的・付加価値的ニーズを満たす交流の有無の把握がコミュニティエンパワメントに貢献できる層の把握に有用である可能性が見いだせた。

研究成果の概要(英文)：We clarified the constituent elements of the preventative care supporter's strength. They are person who are citizen collaborator for community development promoting long-term care prevention. We conducted a survey using the life story method and revealed a total of 40 constituents for the five strengths "competency" "experience" "self esteem" "goal" "resource". Using the assessment guideline of empowerment of elderly contribute to the social support network created in previous research, we investigated in one area and examined whether it is useful as a method to grasp residents who have the strengths that can be used for community development. We found out that grasping the existence of interaction with others that satisfy private needs and value added needs is useful for grasping the people that can contribute to community empowerment.

研究分野：地域看護学

キーワード：高齢者 介護予防 地域づくり ストレンクス

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の学術的背景

本研究の着想に至った社会的背景

2006年度の介護保険法改正では、予防型重視システムが導入され、介護予防事業を含む地域支援事業が創設された。この見直しにおいて、「介護予防」は要介護状態の軽減や悪化の防止だけでなく、一人ひとりの生活の質(QOL)の向上や自己実現を目指すことも目的としている¹⁾。この時導入された介護予防ケアマネジメント事業には、高齢者の身体機能の低下などの問題点だけでなく、諸活動への参加や個人の持つ「得意なこと」や「強み(ストレングス)」を活かした目標指向型ケアマネジメントが提起されている²⁾。

実際の介護予防事業においては、参加者が集まらない、ニーズを満たすプログラムが提供できないなどの課題がある。

こうした背景には、高齢者を弱者(ハイリスク者)というカテゴリーに入れ込み、マイナス面(運動機能や認知機能の低下など)を改善させていくことに主眼をおいたプログラムへの抵抗感が高齢者側に生まれてしまうことも一因との分析がなされている³⁾。高齢者が自ら進んで介護予防に取り組み、自分らしい生活を維持していくためには、高齢者が地域の人とのつながりを通して日常の生活の場が広がるようなコミュニティづくり、すなわち介護予防を推進する地域づくりが必要であり、地域づくりにおいては、高齢者を介護予防の対象者としてのみとらえるのではなく、地域づくりの担い手として活躍できるようにしていくことが重要とされている。こうした地域づくりをも意識した介護予防活動を進めていくためには、地域にどのような問題を持った高齢者がどの程度生活しているのかといった、従来からの問題発見志向の地域診断に加えて、どのような能力や強み(ストレングス)(以下ストレングスと略す)をもった高齢者がどの程度生活しているの

か、それらのストレングスは介護予防を推進する地域づくりにどのように貢献できるかといったストレングス視点からの地域診断と、それに基づいた介入やサービスのあり方の検討が必要かつ重要であると考えられる。

2011年度の介護保険法改正により、2012年度からは、新たに介護予防・日常生活支援総合事業が導入され、サービスの利用につながらなかった虚弱・閉じこもり高齢者への円滑なサービス導入や、自立や社会参加の意欲の高い高齢者へのボランティアとしての活動の場の提供など、地域の互助機能や資源の現状に合わせて切れ目のない総合的なサービスの提供が求められており、前述した地域の高齢者のストレングス視点からの地域診断とそれに基づく介護予防を推進する地域づくりの必要性はさらに高まっている。

本研究に関するこれまでの研究動向

介護予防事業に参加した高齢者の運動・認知・生活機能の評価・効果に関する研究は多数報告されているが、こうした効果が、高齢者の一人ひとりの生活の質(QOL)の向上や自己実現にどのように影響したのかという研究は、わずかである。

ストレングスという概念を専門職者がケアに導入したのは、1970年代後半のアメリカで、当初は精神障害者のケアマネジメントに活用された⁴⁾⁵⁾。利用者のケアマネジメントへの満足度が高まるなどの成果があり、2000年代には、我が国の高齢者ケアにおいてストレングスを活かしたケアの実践が強化され始め、それに付随してストレングス概念を活かした高齢者ケア実践研究が増加してきているがその蓄積は十分ではない⁴⁾。神山は、介護予防と生活支援において高齢者のストレングスを引き出す支援方法の開発を試みているが、自己表現や自己決定等の確立が育ちにくい我が国の国民性や文化の中でストレングスを引き出す支援やアセスメントには、さらに実践での試行と技術や知識の蓄積

が必要と述べている⁶⁾。

2. 研究の目的

本研究は、介護予防を推進する地域づくりに役立てられる高齢者の強み（ストレンクス）とは何かを明らかにし、それらを把握・評価する方法を開発することを目的とした。

そのために、以下の2つの研究を実施した。

【研究1】

介護予防を推進する地域づくりを担う人材として養成されている介護予防サポーター（高齢者の介護予防、健康の維持向上に住民側の協力者として活動している者）を対象に、これらの対象者の持つストレンクスの構成要素を明らかにする。

【研究2】

先行研究で開発した指標⁷⁾を用いて、一地域の住民の社会的サポートネットワークにつながるエンパワメント状況を調べ、コミュニティエンパワメントに貢献できる地域住民の特徴を明らかにする。またその結果から、本指標が、介護予防を推進する地域づくりに役立てられる住民の強みを把握する方法として、有用であるかを検討する。

3. 研究の方法

【研究1】

(1) 調査対象

A市に住む、介護予防サポーターとして社会参加をしている住民で研究の同意を得た4名。

(2) 調査方法

承諾を得られた対象者に対し、ライフストーリーの形式を用いながら、半構成的面接による聞き取り調査を実施した。

ライフストーリーは、自分の人生（生活）経験を表現するのに最も適したコミュニケーションの形態とされている⁸⁾ことから、能力や経験、目標などの「ストレンクス」を引き出す方法として、適すると考えた。

(3) 調査時期 平成27年8月

(4) 調査内容

基本属性

年齢、居住年数、家族構成、職業歴と退職時期、婚姻状況、現在参加している社会活動の種類・数とそれぞれの参加時期

対象者の持つストレンクス

仕事によって得たもの・貢献したこと、過去の経験（一生懸命取り組んだこと・自慢に思うこと・嬉しかったこと・楽しかったこと）、目標や願望について、健康について気を付けていること、自分自身の性格についてどう思うか、人付き合いは好きか、家族の存在、家族以外の人の存在、交流の中で得ているもの・与えているもの、交流活動の場と移動手段、社会参加への関心の有無・時期・理由、参加に至った理由、自分の強みが社会参加に影響していると思うかなどについてインタビューガイドを用いて、自由に語っていただいた。

(5) 倫理的配慮

調査対象者には口頭と文章で本研究の趣旨、目的と方法を説明し同意を得た。任意性、個人情報保護、データの研究目的以外の不使用、不利益がないことを説明し、承諾を得た。

(6) 分析方法

インタビュー内容を逐語録に整理した後、ストレンクスについて語られた内容を1単位として取り出し、コード化した。分析の視点は、コード内容の類似性と異質性に注目して分類統合し、カテゴリー化した。

【研究2】

(1) 調査対象

B市C地区の全世帯（1000世帯）の1000人（世帯につき1人）

(2) 調査方法 留め置き式質問紙調査。

(3) 調査時期 平成29年11月～12月

(4) 調査内容

属性（性別、年齢階層、居住年数、地域活動への参加の有無）

社会的サポートネットワーク構築につながるエンパワメント状態（先行研究から、他者との交流の目的とその性質によって分類した表1に示す7分類項目に基づいて質問紙を作成し4段階で回答を求めた。

表1 交流の目的と性質による7分類項目

交流の目的の性質	交流の目的
私的かつ生活必須的ニーズを満たすための交流	A 心身の健康を維持する
	B 生活に必要な援助を受ける
社会的かつ生活必須的ニーズを満たすための交流	C 属する集団や地域の調和を保つ
	D 属する集団や地域の役割や機能を維持させる
私的かつ付加価値的ニーズを満たすための交流	E 喜びや満足感を得る
	F 自己実現を図る
社会的かつ付加価値的ニーズを満たすための交流	G 属する集団や地域の人々の役に立つ

(5) 倫理的配慮

研究開始前に、千葉大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会の倫理審査を受けた。

調査への協力は、研究協力者の自由意思に基づき任意であることを保障した。

回収された調査紙等は、研究代表者の研究室の鍵のかかった保管庫で保管した。また、電子媒体（パスワード付き USB）に保存し、鍵のかかる保管庫で保管した。

(6) 分析方法

項目ごとに記述統計を行った。社会的サポートネットワークにつながるエンパワメント状況のパターンを明らかにし、今後地域活動への参加の可能性のある人の特徴を明らかにするために、地域活動への参加の有無別に、クロス集計した。

4. 研究成果

【研究1】

(1) 対象者の基本属性

対象者の年代は60代から70代で、全員が男性で既に退職していた。介護予防サポーターの参加時期は60代から70代の時で、全員が介護予防サポーター以外の社会活動にも参

加していた。

(2) 対象者の持つストレングスの内容分析の結果、365コードが得られた。ストレングスの要素である、能力、経験、自尊心・自己肯定、目標、資源にそれぞれ意味ごとに分け、カテゴリー化を行った。その結果として、能力6、経験8、自尊心・自己肯定10、目標5、資源11のカテゴリーが得られ、介護予防サポーターとして活動する対象者の持つストレングスの構成要素が40抽出された(表2)。

表2 介護予防サポーターとして活動する対象者の持つストレングスの構成要素

領域	構成要素
能力	過去の経験で取得し、地域活動や社会活動に活かせる能力 人と上手に付き合っていくための知恵・能力 自分の健康を管理する能力 子供の頃に教わった知識や知恵 物事を自分で決めて調節する能力 集団活動を主体的に動かしていく能力
経験	地域活動に参加し貢献した経験 今の地域活動にも活かされている知識や能力を修得した経験 人をまとめ、上手に関わっていくための能力を得た経験 自分の気持ちや考えに従って行動した経験 一生懸命取り組み、乗り越えた経験 思うように上手いかなかった経験 他者からの影響で喜びや豊かな人生を与えてもらった経験 自分が人に何かを与えた経験
自尊心 自己肯定	地域役員としての役割への自負 社交的で、主体的に行動を起こす性格 面倒見の良い性格 人を大切に、上手に付き合っていきたいという考え 責任感の強い性格 前向きな性格・考え方 地域活動に対するポジティブな感情・考え 健康で長生きしたいという考え 自分の意見を持ち、それに従って行動したいという考え 物事に幅広く熱い心で取り組む姿勢
目標	高齢者に対する関心と助力への意思 地域や社会に対する関心と助力への意思 健康に元気に生きたいという意味とそれへの努力 自分のやりたいことをやる意思・意欲 市の制度活用に対する関心

資源	身近にある地域活動の場
	協力やサポートをしてくれる地域の人々の存在
	自分に地域や社会での役割を依頼してくれる人の存在
	地域活動への参加や継続を支援する制度や人的・物的資源
	健康な身体
	健康な身体を維持するために利用できる保健医療資源
	家族との良好な関係性
	地域活動への参加や継続を後押ししてくれる家族の存在
	自力での移動手段
	地域活動を継続していくための動機となる、それらの活動を必要としてくれる地域の人々の存在
人生に刺激を与えてくれる人の存在	

【研究 2】

(1) 配布数と回答数

924 世帯に質問紙を配布し、417 名から回答があり (回収率 45.1%)、そのうち有効回答数は 342 (有効回答率 34.2%) であった。

(2) 属性

年代 回答者の年代は、30代 13名 (3.8%)、40代 27名 (7.9%)、50代 27名 (7.9%)、60代 82名 (24.0%)、70代 148名 (43.3%)、80代以上 43名 (12.6%)、未回答 2名 (0.6%) であった。

性別 回答者の性別は、男性 167名 (48.8%)、女性 171名 (50%)、未回答 4名 (1.2%) であった。

地域活動の有無 回答者の地域活動の有無は、有りが 108名 (31.6%)、無しが 218名 (63.7%)、未回答が 16名 (4.7%) であった。3割強が地域活動有と回答した。

(3) 社会的サポートネットワーク構築につながるエンパワメント状態

表 1 に示した 4 つの交流の目的の性質に該当する質問項目にひとつでも、そう思うあるいはややそう思うとの答えがあるかどうかを確認し交流の目的の性質による社会的サポートネットワークにつながるエンパワメント状態を分類し表 3 にまとめた。

表 3 社会的サポートネットワーク構築につながるエンパワメント状態の分類

交流の目的の性質				交流の目的の性質による社会的サポートネットワークにつながるエンパワメント状態の分類
私的	社会的	私的	社会的	
生活必須		付加価値		A 私的ニーズを満たす交流があり、さらに社会に貢献しようとする付加価値的交流への可能性が高い状態 184 名
有	有	有	有	
有		有	有	B 社会に貢献しようとする付加価値的交流への可能性があるが自己をエンパワーするための交流の必要性も高い可能性がある状態 83 名
		有	有	
有	有		有	C 付加価値的交流は私的ニーズを満たすものに限られており自己のエンパワーはされているが社会への貢献までは至っていない状態 13 名
			有	
有			有	D 生活必須的交流に限られており自己が十分にエンパワーされていない可能性がある状態 36 名
	有			
				E 交流の実態がないあるいは意欲が低く孤立の可能性も考えられる状態 19 名

この結果と属性の地域活動の有無のクロス集計の結果を表 4 に示す。

表 4 地域活動の有無別 社会的サポートネットワーク構築につながるエンパワメント状態

社会的サポートネットワークにつながるエンパワメント状態の分類	地域活動有無			計
	あり	なし	答 未 回	
A 私的ニーズを満たす交流があり、さらに社会に貢献しようとする付加価値的交流への可能性が高い状態	88	90	6	184
B 社会に貢献しようとする付加価値的交流への可能性があるが自己をエンパワーするための交流の必要性も高い可能性がある状態	12	66	5	83
C 付加価値的交流は私的ニーズを満たすものに限られており自己のエンパワーはされているが社会への貢献までは至っていない状態	2	8	3	13
D 生活必須的交流に限られており自己が十分にエンパワーされていない可能性がある状態	4	30	2	36
E 交流の実態がないあるいは意欲が低く孤立の可能性も考えられる状態	1	18		19

未回答	1	6		7
計	108	218	16	342

A群とB群間で、つまり私的かつ付加価値的交流の有無と地域活動の有無に有意な差があった。つまりB群の地域活動無しの66名はコミュニティへの貢献より前に、まず自分自身の楽しみや満足、私的なニーズを満たす交流が十分あることが、実際の地域活動への参画へつながる可能性があると考えられた。

このように、先行研究で試案として作成した「社会的サポートネットワーク構築につながるエンパワメント状態」を把握する指標を用い、コミュニティエンパワメントに貢献できる層を抽出・把握することに活用できる可能性が見いだせた。

今後、尺度化し信頼性・妥当性の検証を踏まえて、介護予防を推進する地域づくりに役立てられる住民の強みを把握する方法として、有用性のあるものとなるようにさらに研究を重ねる必要がある。

<引用文献>

- 1) 辻一郎：介護予防のねらいと戦略. 社会保険研究所, 2006
- 2) 神山裕美：高齢者へのストレングス視点による面接と支援方法, コミュニティソーシャルワーク, No3, 59-67, 2009
- 3) 介護予防マニュアル改訂委員会：介護予防マニュアル改訂版, 2012
- 4) 佐久川政吉, 大湾明美, 宮城重二：高齢者ケアにおけるストレングスの概念, 沖縄県立看護大学紀要, 第11号, 65-69, 2010
- 5) 白澤政和：ストレングスモデルの考え方, 月刊ケアマネジメント, (3), 36, 2006
- 6) 神山裕美：ストレングス視点の活用と展開, 山梨県立大学人間福祉学部紀要, Vol.2, 19-30, 2007
- 7) 井出成美, 佐藤紀子, 山田洋子, 細谷紀子, 岩瀬靖子, 宮崎美砂子：社会的サポートネッ

トワークの構築につながる高齢者のエンパワメント指標の試案. 文化看護学会誌, Vol.1, No.1, 3-11, 2009.

8) 桜井厚：インタビューの社会学. ライフストーリーの聞き方. 東京：せりか書房, 2002：39, 60-61

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井出 成美 (Ide, Narumi)

千葉大学・大学院看護学研究科・特任准教授
研究者番号：80241975

(2) 研究分担者

佐藤 由美 (Sato, Yumi)

群馬大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：80235415

桐生 育恵 (Kiryu, Ikue)

群馬大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：00448888

松井 理恵 (Matsui, Rie)

群馬大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：60736263

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

【研究1】

中澤 彩香 (Nakazawa, Ayaka)

【研究2】

石丸 美奈 (Ishimaru, Mina)

竹内 公一 (Takeuchi, Koichi)

井出 博生 (Ide, Hiro)

関谷 昇 (Sekiya, Noboru)

臼井 いづみ (Usui, Izumi)